この夏

倉橋惣三

この夏も亦旅の夏であつた。

その旅は、七月下旬、文部省の講習と、佛教保育協會の講習とを東京で了つてから始まる。

會津若松

第一は會津若松。福島縣の主催で「幼兒保育」(八月一日)。託兒所、殊に農繁期託兒所の施設を中心にして五時間。此の春以來の宿約を果した譯だ。元來、東北地方は、關西地方に比較して、兒童中心の社會施設がおくれてゐる。もとより都市地方と農村地方とは、社會事業の性質を異にするが、近世的兒童愛護の必要は、どこにも、それ〴〵の要求のある筈だ。福島縣社會課が、近く連續して、兒童保護を主題とする講習を開催してゐる努力は大に多としなければならぬ。

宿は東山溫泉。雨に水量を增した溪聲が枕について、旅の第一夜らしく眠りは淺かつたが、朝、うす日さす明るい浴槽の、あの清澄な溫泉は快かつた。若松の市街に接續すること斯くも近くして、しかも、斯くも山容の趣深きものあるは、さすがに此の溫泉の有名な所以である。講習後、水谷社會課長及び、史蹟に精しい原田兼次、庄司達雄兩君の案內を煩はして、雨中飯盛山と舊城趾とを訪ふた。飯盛山は如何に長く余の心にあつたこ

とであらう。特に舊山道を選んで聊かたりとも當時の幽草繁茂の趾を偲ばうとした。白虎隊健兒の一隊が、折れた刀をつき〳〵辿つて來た山洞には、頃日來の强雨で混々たる濁水が渦卷き流れてゐた。山頂にある一列の墓石は、少年の墓らしく小さく、折からの雨にさびしくぬれてゐるが、一墓毎に彫られたる姓名と、十六歳、自刄の文字は、悲壯、壯烈の氣、四邊に迫つて、肅然として頭をさげしめざれば已まぬ。自刄の地點は、少しく離れたる山側、老松骨露はなる邊りにある。少年等の血走る視線は前方の天主閣に凝り、そこに炎々としてもえ上る火焰は、一圖に落城を思はしめ、一圖に殉死を決意せしめたのである。或者は從容として胸を開いた。或者は聲をあげて詩吟した。或者は相對座し互に手を執つて胸を突いた。死は易く、恨みは長し。一死君公に奉じて、一點の遲疑なし。親代の年齡にすれば、皆中學校の四年生か、五年生か。日本武士は、實に、此の年齡にして既に毅然たる武士であつたのである。舊城趾は、今尙劃然たる礎石の趾を存して、東道の諸君指呼して當時の狀を語ること詳かである。成る程、あの山から砲彈を浴せられては、如何に剛强會津城と雖も如何ともすることは出來なかつたに相違ない。その猛烈なる砲彈の跡は、今も老樹の幹に黑く殘つてゐる。而してその時城中に立籠つてゐたものは誰か。城中の男子は殆んど皆四方の迎擊戰に赴いて、殘るものは皆婦人であつたのである。しかも、その婦人達の奮鬪、活躍、袂は斷り切り、髮は固く束ねて、連日連夜の激勞に、字義通り骨を碎いたのである。實に之れ、武士女性の典型。委々懦夫を起たしむるものゝみ。古會津女子の名、何人も知らざるはないが、今、此の現地に立つて、感更に深いものがある。余は、番傘を肩にして、强雨の中に立つた。この數刻の感慨

を、永久に去り得ないであらう。且、この母、この女性にして、あの少年達があつた。古くして新らしき、家庭教育の原理に、余の思ひの深められて居たことも言ふまでもない。

千葉縣

若松を夜出發して、朝七時上野に着いて、八時の開講に充分間にあふ筈であつたのが、途中、水害の爲に郡山で汽車をとめられて、上野に着いたのが九時、そのため、東京昭和保姆養成所の講習(二日)に意外の迷惑をかけたことは、この夏の行動中唯一の齟齬であつた。殊に、あの帝國教育會館の講堂に、溢れる程の多數の講習員諸君が、遲れ講師を靜に待つてゐて下さつた熱心の光景には、足りない時間をほんとうに足りないと思はざるを得なかつたのである。

東京へ歸つて家へ立寄る暇もなかつたが、その午後の兩國驛には、家族達が待ちうけてゐて、それから後の行を共にした。千葉縣東金に二日、同じく鴨川に三日。いづれも講演題目は「兒童心理」小學校の教員諸君を會員とする教育會の講習會であつた。家族をつれてゆくなどは、多少遊山的に見えて講習に相濟まぬようの感もあるが、子供達を是非一度九十九里の壯觀に親ませ度いといふ豫ての親父心を、一寸此機會に實行した譯である。子供の一人は信州野尻湖へ學校から連れられて行つてゐる。二人の子どもは之れから、靜かな海岸へ行つて滯在することになつてゐる。しかし、そこには大きな波濤といふものがない。毎年の海水浴も、水泳本位に靜かな海ばかり選ぶ。しかも、たまには、でつかい大濤を見せないと、海洋の威嚴を忘れると困る。九十九里に、そいつを一つ見せてやつて貰ほうといふ譯である。但し、子ども等は、容易に泳げる海に早く行きたがつてゐるら

しい。親父といふものは、考へのある(!)親父といふものは、餘計のことを考へるものだ。

靜　岡

千葉縣から引きかへして、靜岡へ行つた。縣保育會の講習（九、十、十一日）である。こゝの講習は之れで何度目であらうか。前に大阪へ毎年のように行つて居たのに次ぐ、なじみの多い講習會である。そして、一回毎に、發達充實してゆく實況を見ることは、この地の保育界の爲に眞によろこばしいことである。峯女子師範學校長始め幹部の位置にある諸君の熱心な努力を多としなければならぬと共に、縣の學務部當局の理解を感謝しなければならぬ。しかも、今が絶頂でも一段落でもない。之れからといふ發展の意氣研究の精進が、より多く心を强からしめる。余の例の日本保育地圖の中に彩られてゐる東海保育聯盟が成立するの日、其の中堅として、うんと働いて貰はなければならぬのはこゝだ。

こゝで、保育談以外、余の最も傾聽した話題は、先般、聖上陛下が、地方民情御視察の思召を以て本縣に巡幸あらせられた時の御模樣である。その御精勵、そのこまやかなる思召の數々、誠に恐懼にたえない次第であつた。縣民一般に及ぼしてゐる深甚の感激は鮮明に到處に見ることを得た。その際のことの中に、本縣保育界の耆宿宇式女史の、光榮ある特別拜謁のよろこびが、殊に一般の感佩を以て語られたことは勿論である。

宿は凉しい處といふ、會幹部の欵待で興津に居た。いつ來て見ても大好きな處である。殊に、家族が滯在することになつてゐた靜かな海岸といふのが、余の講習とは無關係に、前からこの海岸に制定されてあつたので、夜は常に子ども等と共に遊んだ。毎年の講習旅行で、此の親父の一つの物

足りなさは子ども等と暫くでも離れてゐることだ。興津の三日間を特に喜んだ譯合ひが、あの風光の自然のみでなかつたことを、正直に斷はつて置かないと多少うそつきになる。又折角くの會幹部のお心づかひに對して相濟まない。

豐　橋

豐橋市立高等女學校長山本嘉一君は、その同窓會の主催を以て、特に「家庭教育」の講習（十三、十四日）を計畫し、早くから其の約束をなして居つた。特に「家庭教育」を主題とする講習會は、從來多くない。一回の講話といふようのことは常にあるが、二日たりとも講習會の形を以て開催せられることは、絶無でなくとも、決して多いことではなかつた。しかも、文部省は今年から特に此の問題に力を入れて居り、余個人としても、今最も力を入れて居ることの一つだ。山本校長の招きに、新らしき興味と熱意を以て應じたことはいふまでもない。靜岡の講習の後直ぐ、豐橋に移つた。興津までわざ〳〵迎ひに來て呉れた山本氏は、家族も同伴してと言はれたが、家庭教育をそうまで甘くしてはならない。

余は、近年來、東京に於て、五十名前後を以てする、組織的な母の研究會を幾つか決行してゐる。數回乃至十回近くに亘る稍系統的な講義と共に、各家庭の實際問題に就て懇談し、相談してゆくのである。而して、現に我子の實際教育に直面せる、生々しい母の心の切實さに絶えず觸れもし感激もさせられてゐる。實に、母に語ることの貴重さは、余の今日の最も強い實感になつてゐるのである。豐橋の此の新らしい試みに對して、如何に興味を持つたかは問ふまでもない。又、集まられた聽講諸君の一人毎の熱心も非常のものであつたのを感じた。

山本氏は、家庭教育を重んずると共に、親父を喜ばすことにも極めて周到であつた。それは、二泊の滯在を二箇所に分けて、第一日は辨天島の丸文別莊に、第二日は蒲郡の常盤館に、東海の二名勝を滿喫せしめて下さつた心遣ひに明らかである。あの解放的な辨天島の百パーセントの白砂青松。その青松に倚り寄ふてゐるおばしまに見た夕日の色。興津に、心から打とけた、なごやかな親しみをもつたのと相對して、濱名湖には、化粧した人を見るような、惚々しさを感じたと言つてよさそうだ。蒲郡は、その地域の風光と共に、常盤館そのものを以て著聞してゐるといつてよい。それ程に基模の大きい、設備とサービスの行き屆いた旅館だ。余をして、うつかりすると、講習會講師たることを忘れさせて、ホテル經營法研究者でゝもありそうにならせる程感心させたといつていゝ。余のような旅行を多くするものは、自づから旅館といふものに相當關心をもつようになる。行屆かない宿では、旅なればこそと我慢もするが、旅なればこそ行屆いた旅館はうれしいものだ。興津、濱名湖、蒲郡と、東海の三つの美しい海を、それ〴〵最上の角度に於て樂しむことの出來たのは、確に此夏の愉快な收獲の一つだ。

海のことばかり言つたが、今年始めて竣工した豐川稻荷の新らしい殿堂にも詣でた。なんでも四十年餘の久しきに亙つて工をつゞけて居たものだといふことで、當て、子どもの時詣でた記憶とは、全く別の偉觀をなしてゐる。

山口

この間、數日を東京の用事に費して、再び、講習行脚の人となり、十八日出發山口に向つた。山口縣主催の講習會で「幼兒保育概論」を講ずるのである(二十、二十一、二十二日)。

講習員は小學校低學年の擔任諸君と、幼稚園關係者諸君と、農繁期託兒所などの社會事業關係諸君であるが、特に余を喜び迎へられたのは山口縣保育會の諸君であつたと信じてよからう。余は、岡山縣保育會には屢々趣いた。それから、ずつと飛び惑えて九州には行つた。しかし、其間にある此山口縣と廣島縣の保育會には、今まで一度も機會がなかつたのである。(勿論個人的には懇意が少くなかつた)がそれで兩縣の諸君からも、屢々その機縣をつくつて會れといふ懇請であり、余も、心からそれを期して居たのであつた。それが、この夏に於て、兩縣とも實現せられるようになつたのである。愉快といふべきである。わけても、山口縣に於ては、縣學務部が、直接の主催として、此の教育の爲に貴重な講習計畫の一部を割き與へられたことは、斯道の爲に、特筆して感謝してよいことゝ思ふ、同縣保育會の人々の熱心が此の勢を促したものにも相違ないが、一つに縣當局の理解によるものであることは勿論である。其の地方の保育界が、熱心はあつても、未だ普及發展を充分してゐないといふ樣の場合、此の山口縣の如き理解ある指導を與へられることは、我國の現狀に於て最も切望にたえぬ處である。

講習期間中、山口縣保育會の總會が開かれ、理事眞澄超倫氏に促されて、そこでも一席の話をした。而して、その時、主題は「保姆の心づかひ」といふことで、若い保姆諸君への希望を述べたのであつたが、それよりも、余の特に力言したのは他にあつた。卽ち、豫て、余の希望してゐる、中國保育聯盟の提唱と勸說であつた。このことに就て、余は相當以前から熱心に考へてゐる。全國保育會の聯關未だ極めて微弱なる今日に於て、先づ心須のことは全國各府縣に保育會の出來揃ふことであるが、それと相俟つて急務とするは、全國

を大別して、地方聯盟の出來ることである。以て、全國的聯盟の中間單位たらしむることである。之れが爲には、適當の機會、適當の人々とも相談してゐることであるが、その最も速に、實現の可能性を具してゐるものを、中國保育聯盟と思つてゐるのである。而して、その實現の爲には、中國に於て、最も早くから發展せる岡山縣保育會(吉備保育會)が、下働きとなり、先頭となり、姉妹關係にある、廣島縣保育會(藝備保育會)及び、山口縣保會と、協力協同、相提携し、相切磋し、山陽道に一大保育團結をつくることにあると思ふのである。吉備保育會へはいつでも勸說の機會があるが、山口、廣島兩保育會を併せ訪ふことの出來たこの夏こそ、是非とも極力勸說いたして置かなければならぬ機會と信ずるといふ意からである。而して幸にして、諸君の充分の熱意ある諒解を得たと信ずることの出來たのは喜びにたえぬ。

一寸考へると、甚だ差出がましい餘計のことのようでもある。根が遠慮深い(?)余としては、差控へたいようの氣もすることである。併し、之れは日本の保育界の大きな進展の爲に、是非とも實現させ度い正當の希望だと信ずるのである。若し夫れ、あの背椎山脈を隔つることに多少の不便はあるが、山陰の鳥取、島根兩縣の保育界が之れに參加して來られ得れば、(余は、此九月島根縣保育會に赴いて、之れを勸說する機會がある。)眞に全中國の保育聯盟が完全に成立し得る譯だ。それも、伯備線の聯絡ある今日ちつとも困難なことではないとも思はれる。何せよ。その時は、どんなに愉快なことだらう　愉快のみならず、どんなに有意義なことだらう。中國保育聯盟の成立は、それが好範例となつて、續々と他の地方聯盟の機運を促進すると信ずるからである。そして、全日本保育聯盟の基礎を確立すると信ずるからである。保育

聯盟につき、之れ迄いろんな形の夢を夢にして來た後で、今余の確實性を以て所期して居る、之れが一つの期待なのである。

こんなことを考へて凝つて來る肩を毎日やはらげて呉れたのは湯田の溫泉である。湯田の溫泉は新らしい都市擴張の中に編入せられて、今では山口市の一部といふことになつてゐるが、古く著聞し、彼の七卿落でも有名の處である。山ではないが、名の通り凉風靑田を吹き拂ふ靜かな溫泉である。殊に余の宿泊した室は、その凉風が不斷に流れ込む廣い二階で、講習の後の午後は、その風と、清澄な溫泉とに閑を擅にした。加ふるに、縣立圖書館から提供を乞ふた防長史料に關する幾多の圖書は、いつも、夜風にあふらるゝ白蚊帳の中、枕燈の下、思はず更くるまで好讀書生たらしめて呉れた。中にも、佐久間久吉氏編の「防長史綱」の識と筆と、天野御民氏編述杉民治翁見聞の松下村塾零話の質と實と、いづれも小さい冊子ながら、余の爲に太だ有益のものであつた。

講習中、白銀市長の招宴をうけたが、氏は、陽明學者として土地に聞ゆる人である。講習終了の午後は、山東縣視學の案内を煩はして、市中の史蹟を視た。中にも大内氏時代の古きるりこう寺の五重の塔の古寂、我國最初の布教師たるフランシスザビエル紀念塔の聖寂、一つは低個、一つは仰睇、共にいつまでも其の場を去り難さを覺えしめた。

萩

夏期の講習旅行日程は、休暇の日限の關係上、自から日の餘裕といふものをとれないが常である。それを、此の山口と、次の三原との間に豫め二日の餘裕をとつて置いた。あこがれの萩を訪はんが爲である。吉田松蔭先生の萩を訪ふて、久し

き宿望を果さんが爲である。

二十三日曇。山口縣保育會の好意により萩までの自働車を提供せられ、縣學務部幼稚園掛たる池田秀夫君特に東道の役を以て同乘。朝八時半宿を出發。途に、先づ秋芳洞を過ぎることゝした。途、約一時間。洞口前の茶屋の少憩、裾短かな浴衣と、草履とに更へ、案内者に從つて洞内へ進んだ。何事も實際は期待に背くのが常である世に、之れはまた、何んたる豫想以上であらう。以上といふも足りない。殆んど超豫想とは此のことだ。しかも、人間の想像力が小さいからではなく、自然の偉巧の餘りに驚異すべきためだ。奥行き約二千米、洞窟内は空濶で、最も廣い場所は、廣さ八十餘米、高さ三十餘米もある。而して、その底には一大溪流が、或は瀑布となり、急瀨となり、深湍となつて漲り流れて居る。大體は、その水に架せる狹棧に沿ふて進むのであるが、或る箇所は、渡舟に棹して渡るところさへある。奇岩、奇床、天井からは多數の怪異なる鐘乳石が垂下し、黄金柱と稱するもの〻如きは、高さ八米、周圍三米の偉觀で、仰いで、たゞ愕然たるの外はない。而して　之れがすべて地下である。余は、遺憾ながら地質の理に昏い。驚異をたゞ驚異とするの他はないが、それにしても驚異以上である。洞内には各所に電燈が點ぜられて隅々明らかゝあるが、之れは　今上陛下、皇太子として御視察遊ばされた時からのことで、其の以前は眞の闇、松火を點じて導き入れたものだ　うだ。その頃の神祕は、おそろしいばかりであつたといふ。

洞を出で、（洞内一時間半餘を要す）再び車上の人となり、一路、萩町に向ふ。約二時間、愈々則町に入つた。

町役場には既に、史跡に精しき藤本瀧江翁が今日の説明者として待ち受けて居られ、特に町長の

好意による自働車に、池田氏も同乘、何は兎もあれ、第一に松下村塾の跡に急いだ。先づ松蔭神社に參詣。松下村塾は、そのすぐ後ろにある。思へば、東京府立一中の三年生の時である。德富蘇峯氏の吉田松蔭傳を讀んで少年の心に、此の偉人に對する尊崇の念を喚起せられて以來、松下村塾は一つの聖地として余の巡禮豫定目錄中の最も重要なるものとなつたのである。その後、松蔭先生に對する多少の研究を進め、殊に教育史を講じたりするようになつては、益々その巡禮心を强められて居たのである。昨夏も山口縣の招きを受けて、寶積の講習に來た時、足此の縣に入るを機會として宿望を達せんとしたが、遂に時間のゆるしを得ず、遺憾之れに過ぎずとしたが、今日こそは茲に此の聖地に立つて居るのである。何たる簡素、隣下の物置に疊を入れて、先づ塾生を迎へた最初の一室には、先生の使用せられた、細長い木机がある。たゞ一枚の粗板に脚を附したようのものである。塾生等と共に、石を運び、壁をつけて增築せられた、あの有名な室がその隣に接する。塾生漸く多きを加へ、先生が席を移されたといふ二階は二階といふよりは屋根裏である。全屋、數十步にして一周することが出來よう。しかも、こゝに、明治維新の魂は火の如く動うたのである。若き先生は、或は先生自身より年長なる、或は年少なる、藩中、上下の俊英青少年と起臥を共にして、國土の教育を施されたのである。室內の壁間には、數個の額が提げてあつて、塾生高杉晉作、塾生品川彌次郎、塾生伊藤博文、塾生野村靖、塾生山縣有朋等の名が記されてゐる。塾の後ろは、先生の父母の家がある。そこに幽閉の室があり、彼の米を搗きつゝ經史を講ぜられた米搗場がある。その米搗道具と上から吊し下げた書見臺とは、今は別にその側に移して、丁重に保存せられてゐ

る。余は、こゝに、更めてその當時を詳說しない。實に恭しく額づくの心を以て、それ等の遺跡と遺品とを看た。更に、先生の遺品を蒐めたる庫は、實に先生の精魂の尊き血晶のみのである。感慨盡くる處を知らない。

松蔭先生遺跡を辭して、古き新らしき史跡の數々を歷訪した。伊藤公の舊宅を周り、明倫堂の跡に立ち、その他玆に擧ぐべく餘りに多く、餘りに切實なる史跡を見、祕話を聽いたのである。而して萩に對する余の記憶の中心をなすものは、矢張り、久しき憬れの松下村塾である。同じく余の辿禮目錄中の一つであつたスキスのノイホフは余にペスタロッチを燒きつけた。それと同樣に此の松下村塾は、余に松蔭先生を刻印したともいつてよい。この夏、余の精神にとつての最大の收穫は、實に萩の一日であつたのである。

三原

翌二十四日惜しき萩を去つて、廣島縣三原に到つた。道順からいへば逆路である。藝備保育會を訪ふことは、昨年、保育會が出來て以來の宿志であつた。講習(二十五、二十六日)に於ては、低學年教育の問題を交へ講じたが、會の始めに當つて先づ力言したことは、山口縣保育會に語つたと同樣の、中國保育聯盟の勸說であつた。副會長たる山崎女子師範學校長、同附屬主事宮川氏を始め、會幹部諸君にも別に力說して、多大の贊意を得た。殊に、岡山から、折井彌留枝氏外數名の保姆諸君が、特に此の講習に出席する爲に來て居るといふ、全く思ひかけぬ機會を捉へて、吉備保育會への勸說を、繰りかへし〳〵ことづけ得たのは意外の幸であつた。

三原の岩井豐夫君は書信を通じて、久しき舊識

の間である。特に好意を以て提供せられた三原警察署のランチに同乘して、海上二里双鷺島に村長高原隆三氏を訪ひ、また、同氏の盡力による私立龜山幼稚園を訪ふた。高原氏は島第一の舊家、當主隆三氏は全島五百餘戸の生産的福祉と精神的向上との爲に、常に意を竭し、私財を投じて惜しむなき人。その私邸の座敷には、書架に大西郷全集あり、齋藤茂吉氏の新らしい歌集などあるを見た。有德平和なる島の生活が床しい。幼稚園は同島の龜山神社神官たる同性高原章氏夫妻の經營によるもの、同部落内（島は三部落に分れてゐる）の幼兒は殆んど全部入園して居るといふ。保育料なし、謝禮の如きも、各家庭の隨意にまかされてゐる。全く篤志幼稚園である。斯くの如き小島に、幼稚園のあるのが既に稀であるのに、假令神社附設でないとしても神道に屬する幼稚園の經營は、恐らく他に多くあるまい。

島を辭して歸らんとした時、干潮でランチが動かない。徐ろに滿潮を待つ間、磯の岩に踞して、島の諸君と共に三原銘酒醉心の盃を嘗めて居ると、夕闇漸く迫り來り、沖より歸る數十艘の藻刈舟、對岸の島に塒を求むる群雀の聲、靜穩なる瀨戸内海の夕べは更に靜穩に、詩趣、歌にもならず、胸に漂ひ充つるを覺えた。

廣　島

廣島市に開催せられた、縣主催の講習（二十七、二十八、二十九日）は、豐橋に於けるものと同じく、特に「家庭教育」を主題とするものであつた。而して、聽講主體は補習教育專任女教員諸君といふことであつたが、此の際之れを一般婦人諸君にも公開せらるゝこととなり、家庭婦人諸君が、寧ろより多數に來聽せられたことは、余の講演に母性の溫味を浴ふる上に、一層の適切さを加へた感

があつた。それにしても、縣學務部が、自ら「家庭教育」の講習を開催せられたことは、恐らくや天下に先んずるものとして斯道の爲に大に德としなければならぬ。殊に郡山學務課長、野田教育主事、その他當局諸君の斯道に對する熱心なる態度は、聽講員諸君の熱心と共に特筆すべく、此の講習を序開きともして、將來計畫せらるべき同縣の「家庭教育」促進の前途に多大の希望と期待とを感ぜしむるものがあつた。

親友津山教授は一日余を促して、市内を見物し、且、嚴島快遊の好意を與へて呉れた。鳥居もよし、宮も美し、丘もよし、更に紅葉谷公園内岩惣旅館の小亭、灯の映つる溪流に臨んで、遠慮のない晩餐にくつろがせて貰つた快適は、八月一ばいの旅の終りの慰勞として、眞に嬉しいものであつた。此小亭、頗る水石の趣を凝らし、島に居て海を見ず、たゞ山深きを思はせる趣向、心にくい限りだ。

第二日、野田氏の案内をうけて、舊大本營の内部を拜觀し、特に　照憲皇太后陛下の御座所たりし建物をも拜觀することが出來た。師團司令部と木造無裝飾の建築、兵士の居る聯隊の建物と些の變りもない。その内に、大本營の全部があり、畏くも八ヶ月に亘る玉座があつたのである。寒冬深夜、小さき御火鉢一つに、戰地の士卒と戰苦を頒たせ給ひしも此處である。御更衣の室には、御衣桁として細き素竹の一本、木壁に沿ふて取りつけられてあるのが、其のまゝ拜せられる。頭の自ら垂るゝを禁じ難い。

誠に、却て畏れ多い申しようかも知れないが、一夏の講習位、勞を語つては相濟まぬと思はざるを得ぬのである。

第三日講習終了後、午後廣島出發、三十日朝東京驛著。斯くて八月を終り、九月に入つて更に、

六日濱田町に開かるゝ島根縣保育會總會へ行くことになつてゐる。

終りに各地諸君の高誼を謝し、御健康を祈りて筆を擱く。（昭和五年八月三十一日）

濱　田

山陰の秋は早いか。月夜をおそく濱田に着いて、川沿ひの宿の三階に、先づ其の快い清涼を感じることが出來た。

汽車がトンネルを出て、究如、宍道湖岸へ來た時である。夕日あかく流るゝ湖上の美には、自然といふよりも人間の美があつた。今まで海を見て來た目が、急に湖を見たからであらうが、その鏡面に、なんと頰紅の滑かなことよ。わけて、こゝは、去年の夏の思ひ出の、まだ新らしい處である。一夕は雨、一夕は晴、あつらへ向きの興趣をほしいまゝに味はせて呉れた松江の臨水旅館には、今にも名殘のつきぬ思ひがする。その島根縣の保育會、今年も再び招かれたのである。京都濱田間一百有餘のトンネルには相當に口を閉ぢさせられるが、此の保育會への私の心理距離は極く近い。

島根縣保育會總會は、松江と濱田とが一年交替に開催地になる。今年は濱田の番なのである。停車場には、辻女子師範學校長、片寄附屬主事、幼稚園の諸君に出迎へられ、宿では總會出席の爲來泊せられた松江の山口師範學校長に會ふことが出來た。山口校長には、昨年の御歡待に對して、一年振りのお禮を繰りかへした。

女子師範に開かれた總會（九月六日）は、今丁度再振興の機に熟してゐる勢を示した。松江の富田さんが病氣の爲缺席せられたのは遺憾であつたが、同じく松江の吉岡さん、濱田の藤村さんを始め、保姆諸君の一人々々に、少數ながら、裏日本保育

界を負つて立たうとする卓創な意氣込みの見えたのは嬉しかつた。午後「幼稚園保育項目」に就て講演。幹部の人々には、例の中國保育聯盟のことについ勸說し、共鳴を得た。

講演後、片寄主事の御案內で、兩師範學校長と共に、町の名所をドライブした。粟島海岸の奇勝瀨戸が濱、外の浦の濃い潮の色、白波立つ外洋の壯觀、萩の海と同じく、「北」といふものを强く感じさせられる氣がした。粟島公園にある烈女お宗の墓は、芝居の鏡山で有名なお初の墓である。その鏡山は、町に接する山の名であり、その山の松林の中に、尾上の塚のあることも、こゝへ來て初めて知つたことである。幕政時代の義人、通稱芋代官の記念像は、町に近い丘の上にある。此の地方に芋を植えることを敎へたのも此人であり、殊に大飢饉に際して、人民の急を救ふ爲に、獨斷を以て幕府の米庫を開くの義擧に出で、その責に任じて賭腹したのも此人である。その他、代官として仁政雨の如く、今日尙、石州の人をして、普くその恩を感謝せしめて居る。石見の國到る處に此の人の記念碑を見るといふことである。その義貴ぶべし、又、永く恩を忘れざるの心も貴むべしであると思つた。

翌七日、好晴朗々、濱田名物と云つてもいゝ程の澤山の鳶が、悠揚として空を舞つてゐる。午前女子師範講堂に開かれた家庭敎育講演會は、日曜の午前といふに、思ひかけぬ多數の集會で、婦人會長田邊老女史の矍鑠と共に、石見女子全般の堅實味に、敬意を感ぜしめ、語るもの先づ愉快であつた。殊に、此の會後、直に發議する人あり、直に賛同する人あり、特に家庭敎育の研究を目的とする熱心なる母の會の成立したといふことを後に聽いて、欣快といふよりも感謝の至りとした。

その午後、濱田を辭し、松江まで辻校長と同乘

あとは京都まで、がら空寢臺車の中に、ひとりぼつちの旅客とこそはなつたりにけれぇ——。（窓外、月晝の如し。その光の中に浮ぶ伯耆大山の雄姿を眺めた後、車中記す。）

後藤眞造氏著

「フレーベル研究」

倉橋惣三

我國によきフレーベル研究書のないことは、幼稚園研究者にとつてといふよりも、更に廣く教育の學徒にとつて、從來の大きな缺陷であつた。フレベールの研究は、今日殊に其の重要さを加へて來たのであつて、その爲に、適當なる研究書の出づることは、誰れもが待ち望んでゐたところである。後藤氏の新著が此時に出でたことは、斯の道の爲に最も喜びにたえない。

著者の研究は、フレーベルの傳記と主著とを精讀して、その解説、紹介に於て忠實を極めてゐる。所謂評傳の名に於て、斷片的感想を語つたり、抄錄の名に於て部分的拔書きを試みたりする著書とは、全く別である。讀者は此の著者の忠實なる紹介によつて、フレーベルを、先づその眞正面に於て知ることが出來ると信ずる。フレーベルにも側面的研究があるがそれは、正面の確實な捕捉を得た後のことである。今日の、時にフレーベルを云々する人々にさへ缺けてゐる忠實な知識は、此著によつて初めて充分に補はれ得るであらう。又それを希望して已まぬのである。

殊に、我國の幼稚園教育界としては、此の早く存在しなければならなかつた必須の文獻が、茲に初めて具へられたことに就て、著者に深き感謝を禁ずることが出來ない。

（東京市京橋區目黑書店　定價金貳圓）